

## 命を守る見えない優しさ

山鹿市立鹿本中学校3年 城 佳澄

私には弟がいる。弟はいつも元気で明るいがよく高熱を出して苦しんでいる。私はその姿を見ると一年前、弟が熱痙攣による意識不明で救急車で運ばれ一週間入院したことを思い出す。その出来事は父にも母にもかなりの衝撃だったらしく、めったに口にしない。弟が退院をし、家に帰ってきた時父はボソッと母に言っていたことを私は聞いていた。

「少しでもたくさん働いて一円でも多く納めるんだ。助けてもらった恩返しとたくさんの人を助けてほしい思いを納めるんだ。」

私には父が何を言っているのかさっぱりわからなかった。半年が過ぎた弟の3歳の誕生日に、私は思いきってその意味をたずねた。

弟は緊急入院だったため検査や食事、薬などにお金がとてもかかったそうだ。その医療費を一度で退院と同時に支払おうとした父はその価格に愕然としていた。しかし、看護師さんが山鹿市子ども医療費助成制度や子どもの入院などを支援する制度などたくさん保障を紹介してくださったそうだ。その制度を利用した結果、ほとんど無償ですんだと言う。「山鹿市子ども医療費助成制度」は山鹿市が0歳から18歳までの子どもを対象に医療費の一部を助成する制度である。この制度のおかげで、私も、兄弟も薬をもらったり病院で受診を受けることができている。父は

「市の医療費助成も救急車をすぐに呼べるのも日本の人々が税金を納めてくれているからなんだ。その税によって沢山の命が助けられているし、公務員である父さんと母さんの給料もいただけるんだよ。」

と話してくれた。税金のおかげで助けられた命、生活するためのお金、健康でいられることなど色々な幸せや優しさが身の回りであることを知ることができた。この時、私はやっと父が母に言っていた言葉を理解した。父は税金で優しさのバトンをつなごうとしているのだと感じ、今まで不満ばかり言っていた自分が少し恥ずかしくなった。

私の両親は小学校の教師だ。私は両親が忙しそうにしている日を小さい頃から見たことがない。いつも仕事の電話が夕食の時にかかってくる。夜はパソコンを睨んでいる。休日の昼は丸つけ。私はそんな毎日を送る両親の背中をずっと見てきた。遊んでもらえることはほとんど無かったし、家の手伝いをさせられることも多く、愚痴を言うことも多かった。しかし、父と母の思いを知った今、私は

「ありがとう」

と毎日思うと同時にとても尊敬している。私は両親のように税金のありがたさを理解して優しさのバトンをつなげることのできる大人でありたい。自分自身の生活も、沢山の人の生活も幸せになるように願って納税をする大人になりたい。